宗像

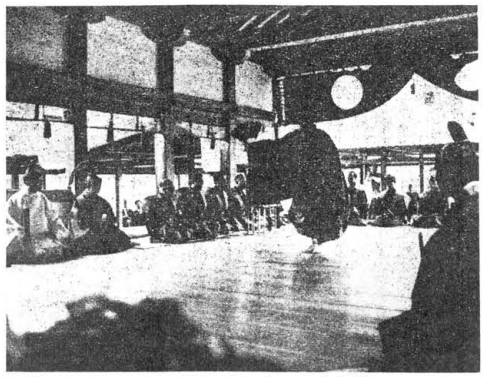
毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09408 ⑥ 1311 代
定価 一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店　福岡市博多区東公園二―三一（〒八三）
電話福岡（〇九二）五五―九四五六番
本社　京都市下京区油小路八条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一―三四一（代）～六番
三五一―三三四・八〇六番
株式会社　井筒

昭和五十四年度

# 秋季例大祭盛大に斎行

## ――一日の海上神幸祭台風（十八号）の余波により初めて中止――



当大社年中最大の神事、秋季大祭は、十月一日より三日までの間、好天に恵まれ郡内は勿論、遠近の参拝者約二万人の人出で大いに賑った。

九月三十日、前日来の台風の余波をうけて終日風雨が激しくて、明日の海上神幸のパレードも中止する事になり、神湊への神幸も取りやめ午后五時、御本殿に於て宵宮祭を斎行、大祭が滞りなく行われるよう厳かな祈りを捧げた。

十月一日、前日来の風波は奇跡的に鎮まり絶好の祭日和となる。予定を変更して、午前十一時大島港を出発された沖津宮、中津宮の神輦は、御座船第三蛭子丸（鐘崎）伸洋丸（大島）の二隻に奉戴され、鐘崎、大島から漁船四〇余隻が目一杯特別供奉船として随行、十一時四十分神湊に着御、更に御座車に乗て午正辺津宮本殿に着御され以下神職奉仕の下、内陣に入御の後、秋季大祭の第一日祭が斎行された。神前には和稲、荒稲、神酒、餌、海川山野の神饌に合せて、各地の篤信者より奉献された神酒や果物郡内七浦漁協より献魚等浜山の御供物が献供された。

先ず、郡内神職代表として年毛神社宮司小島俊一氏によって古儀に則った奉幣の儀が行われたで次に辺津宮の国家鎮護、五穀豊穣、大漁満足の祝詞が朗々と奏上された。次に地元青年団奉仕による宮中舞楽の手振を伝える風俗舞が奉納された。又、氏子会長、中村清之氏を始め、各地宗像会、特別崇敬者による玉串の奉奠が行われた。

境内では、恒例の露店が境内一ぱいに軒をつらね、栗、柿、ショウガ、梨等、秋の季節の味覚の物が並べられ、又、植木屋、茶菓屋竹細工のショウケ屋も昔ながら威勢のよい呼声を参拝者に投げかけていよいよ気分を盛り上げた。

又、夕刻より参拝者が増加し、立錐の余地もない程の雑踏で、当社職員、地元消防団、宗像警察官等総出で整理にあたった。

二日、午前八時古例の流鏑馬神事が行われた。直垂姿に宗像古武士の面影をしのばせる三人の射手が神馬に跨乗の上馬場を疾走し、各々用矢、乙矢の二本の矢を放った。これの当り外れは又来年の吉凶を占なうとも云われ、一射毎観衆より大歓声が上った。

午前中時、第二日祭斎行、宮司祝詞奏上に続いて、宗像町総代より選ばれた野坂の小島金助氏が代表となり氏子奉幣の儀が行われた。

又、数百年来伝承されて来た由緒ある鎧神が喜多流三角勇社中の奉仕により執り行われ、トウトウタラリの流麗な調べに乗って神宝の翁面をつけた舞人によって、厳粛に舞われ、人々の摂災と延命の祈念がなされた。

三日、午前十時、第三日祭が斎行され、一日に引続き風俗、浦安舞が奏される。引続き韋津宮司以下神職奉仕の下、宗像郡護国神社秋季大祭が行われ、郡内町村長、議長をはじめ遺族会会員が多数参列された。又、午后二時、本殿では南坊流滝口社中奉仕により献茶祭が斎行され、滝口社中代表の点前により濃茶がうやうやしく神前に献じられた。

かくして、秋晴れの下、三日間の秋季大祭を終了し、史上空前と云われる義金の波に宗像平野はよいよ秋の深まりをみせ、大神の御神威は益々高まり行くのが感じられた。

## 【御案内】「七五三まつり」

当大社境内に西日本一の規模を誇る、西日本菊花大会が開催され、菊花鑑賞の中、来る十一月十日（土）より十一月十八日（日）迄の間お子様の健やかな御成長を御報告する、恒例の七五三祭を本年も左記により執り行います。

この七五三祭は、男児では「帯揚げの儀」という古来の風習を今に伝えるもので、お子様の御成長の一区切りとされているものです。

当大社には毎年各地の七五三のお祝いにあたられるお子様達が、御両親と御一緒に多数参拝され、境内は菊花と共に華やかな雰囲気がかもし出されております。

当大社では本年も左記により七五三祭を執行いたします。

記

期日　昭和五十四年十一月十日（日）～十一月十八日（日）

初穂料　尚この期間以外でもお祭りは斎行致しております。
一件（一人）二〇〇〇円
一名増すごとに一〇〇〇円の追加となります。

授与品　御祈願お申し込みのお子様には、おすわり、千歳飴・御幣等を授与致します。

祭場　本殿にて斎行
（都合により祈願殿にて斎行する場合もございます。）

以上

## 論説　「うそ」も仁術か

政治家が地下工作に暗躍して、何か贈賄にありつこうとするのは折角当選の数を重ねた切磋を誇示したい心理からである。選挙区に見せたい名誉心と云いたい。それだけなら問題はないが、物質欲つまり金欲しさに取りつかれると、ひどい場合は国民多数が唖然となる程の悪さに走る。選挙運動によって出来た多額の借金の穴埋とは云わない。そう云えば止直だが、多くは不正直が当選しているので、そんな言は聞かれぬ。

曰く「政治献金」となると、噴飯ものと痛撃する批判も出てくる。隠れ蓑の政治献金、今日の国民多数はそんな隠れ蓑にまかされぬ程に、不正政治者から訓練されている。「うそ」も仁術と標記したのは医者の治療上の大切な方便を語りたい為で、政治者の方は語弊が似る恐術である。

ここに述べたい「うそ論」は政治者攻撃ではない、冒頭に筆が辷ったことにしたい。本領は前述する如く、大切な医師の治病の方便である。

宿痾に悩む長年の病人は、その体験からある程度自己の病因や治療効果に知識を持っている。そこで医師の診断を信じない場合あり得る。次にある患者と医師との治療上のやりとりに触れて、大きくは人間道の真髄を観察してみたい。

ある医院の診察室。「先生、私は長年のこの病気で、容易に治らないことや、先生のお言葉が慰めであることも判っています。ほんとうのことを申されても、決して驚きもしません。落胸も致しません」と患者、医師眞然たる態度で「不都合なお言葉です。私は医者です。この種の病気が専門で、特にあなたの病気はよく知っています。何で嘘を云いましょうか。私の言葉を信じて、必ず癒るという気持を益々強くして是非健康体になって下さい」と強調した。

医師は強調の言葉を、ほんとうとは思っていない。自分の言葉は診察の結果に当っていない、違ったことを患者に云っている。しかも此っている。然しこの医師は「うそ」も仁術などとは意識していない。病気を癒してやりたい熱意、それは眞実である。

この「うそ」こそは、宗教や教育の世界にも通ずる。科学者の科学的実証を結論としようとする態度では、学問はそれでよいが、人間道の真実には達されぬものがある。宗教や教育の領域にも「うそ」は仁術が通用する。

クラスの最低辺にある頭のよくない生徒を指導して、クラス最級の習学成績に挙げた先生の「うそ」が光っていたのを思い出す。その生徒は学校の傍の農家の男児、腕白は人並みだが劣等生の折紙は家庭でもあきらめていた。この農家に女先生が下宿した。先生は何とか活路を与えて、彼を向上させてみたいと考えたのである。

「よく書けている、立派だ、もっと勉強すれば習字は誰にも負けないようになる」と、彼の下手な筆跡に賞め言葉を与えた。やがて毎日習字に熱中する時間が増し、他の科目にも努力しだした。ほんとうに成績が伸びて、特に習字は展覧会に代表作品を出す迄になった。「うそ」から出た「まこと」と笑い捨てもなるまい。

「うそ」ところが、そこには強い愛情が輝く感がある。単に習字で仁術が施されるのではない。教育の種々の面に先生の仁術が施されるなら、それこそ教育理念の珠玉と見たい。

禅道の極意もこの珠玉の外にはない。悟りもまた「うそ」に「まこと」を超越する仁術である。

漂々酒脱の仙厓も、商人の街博多に住んで「商売が両手繁昌でなるなら隻手の声は聞く」と詠んで、商人心理を突った先輩の跡を踏んではいない。仙厓の漂逸な諷刺は、気どらず何げなく描いた戯画に遺され、禅僧らしく商人は商人らしくと説いているかに思える。考案に苦しむるより商売に励むが一番だとの主張、今日彼を慕えその書画を尊めて禅道即ち商道と悟る人もある。

出光興産の出光佐三氏が、若い頃から仙厓の遺筆を尊めて無数、毎年同会社が出版されるカレンダーは世界的の逸品との定評があり、海外からの寄贈希望も少くない由である。

「うそ」も仁術が、傑僧仙厓の宗教心にまで到達して、世事を現実的に解決する信術に触れた。考案信術と信術のそまこと、みな人間道の妙味を産む。来世彼岸、健康多祥を祈る心に「うそ」「まこと」の別はない。

（自雲）

## 阿蒙少言

先日の新聞記事に、中国全大代に於いて決定した首脳人事に、華国鋒主席が首相を兼任し、嘗のあった鄧小平副主席は周恩来首相の後継者とならなかった。その心境質問に答えた一言が快い「隠謀が嫌いなことが私の長所で、ざっくばらんに過ぎるが短所」と。餘生を華氏の助手として国事に尽したいとの結びは、わが国の派閥隠謀の常習犯たちよく学んで欲しい◉さすがは中国、九億五千万を養わねばならぬ改新体制の確立をよく心得た指導者達の協力は頼もしい。小細工が巧みで嘘を平気で並べる狡公もの国、雑誌新聞の談話など信用できず、油断もならなぬ。東洋の君子国とはよを様のこと◉おうような大陸人に比べると列島人はいわゆる島国根性で、狭くて包容力に乏しい。そこで想い出すのが戦時中流行した敵性語なる新語、ポンドはいけない、メートルも言うなの偏狭振りでは負ける筈◉軍隊はどうだったか。外国を去れた力キー服を着て鯉幟に戻れ連発をかがれ、とは命令きいなかった。大陸の戦場で、銃後の敵性語排斥の報道に驚いた。砲兵は射撃距離の算定すべてメートル。敵語を追放したら、どうなる。何町何間何尺と射撃号令が出ても、一分間に何発かの砲弾発射は思いもよらぬ◉戦時中の敵米軍は、逆に敵性語日本語に親しんだ。勝利後の占領政策の準備を進め、風俗習慣文字まで勉強していた。ソウル占領の米軍将校が、日本人宅に来て、床の懸軸「月落ち烏啼いて霜天に満つ」を読んだのには驚いた。負けるも当然、島国根性は幅の広さが違い過ぎた◉戦争だけが使う敵性色を帯びた常用語に「闘病」がある。漢語といっても元来本場の中国にはない。自身の体内の病気と闘うなど意味がない。肉体のある機能病んでも友好的に共存すべきもの。

（自雲）

## 第三九回　宗像大社歌会詠草

毎月一日／切　詠草到着順

津屋崎　内田　久美
吾が亡兄が遺骨捧げて還られし松尾佐の遺詠かなしき

須恵　早川　フサ
孟闌盆もす玄秋風の立ちそめて老吾が旅情しきりにうづく

曲　天野トモエ
大きな兄の汽車より投ぐるばん袋を次兄と拾ひしここの踏み切り

八幡　安川　浄生
漁夫の朝（さ）きたる魚の稚魚姫みをれば放たんと海にゆきたり

武丸　原田まつ代
絶えたりと諦めていし樒葉計肯可憐な花見つけ安らぐ

田熊　力丸　一郎
山際の青靄の海静かにて水平線は目路はるかなり

箱崎　吉村　三郎
次々と湧く思い出の終戦日戦野過せる戦友（とも）を偲びて

吉留　高山　信子
千年家の庭に貰いし花大根咲きて実りて無数に芽吹く

名古屋　野崎　傳三
ややぬるき夜半の温泉（いでゆ）に浸りつつ悍りもなく大伸する

田熊　今村　重刀
庭隈にわづか植えたる菲の株花自くして夏ゆかんとす

武丸　原田　リノ
すき間風に交々鳴りし戸障子もいつか静まり夜は明けてをり

原町　八波　五月
もち竿に網に錘追ふ幼等と所詮短かき命と知るや

田熊　吉田　直志
台風の予報はそれて静かなる朝の陽さしに穂なみ靡ふ

津屋崎　谷口　礼子
片手にて乳液つける秋のあしと半ヴスの細帯かたくなに白し

田島　吉武　武雄
着屋の出売りするおらぶ声諸期丘まで澄て聞こゆる

戸畑　田中　ハツセ
年上が背中あわせの女二人老ひ先の事夏剣に語る

福間　二宮　未子
せせらぎの音も消しし紫谷の紅葉色そえ秋は深みぬ

福岡　田熊　鷲津かつ代
虫の音の降るばかりなる草むらにおしろい花の夜を咲きほふ

東郷　藤崎　辰子
ひとりでに硝子戸ひらき出てくる猫に会ひたり謎一つ解く、

徳重　石松や寿子
辞書くれば八幡宮（鶴が岡）に拾ひ米し銀杏の押葉要所より出ぬ

深田　中野　節子
貰ひ米し叔母の弔花の菊の花や切り続け幾日か保つ

宗像　中村　幸
炎天を帰り来りて庭先の無花果の陰に汗を拭きたり

東郷　田中　春子
姑のせし仕来たり守りて誕生日の孫の踏み餅一升を搗く

福岡　林　まつえ
つくづくし筋肉の日より啼きそめぬ自然の節理にしみ入るべ

無名
寛延元年祖の寄贈と全洗石拝殿の前に傾きてあり

田久　立花　勇雄
湯上りのほてりさますと庭に佇てば湯の町玉造りに鶯のこえ

池田　永富　臻
この海に身を投げしと云ふ月のこと幾度聞くに島人知らず

田島　楠　理
招ねかざる客の来たのもすぎし日のほほえみかわす鍾の軽るるよ

福岡　桜井　ツ子
高千穂の谷ふかくして唐茶の熟れしを軒に吊るし人住む

武丸　立花ろせ乃
裏庭のバラの根方に夜々を鳴く一つこうろぎの声よく透る

福岡　桜井　ツ子
高千穂の谷ふかくして唐茶の熟れしを軒に吊るし人住む

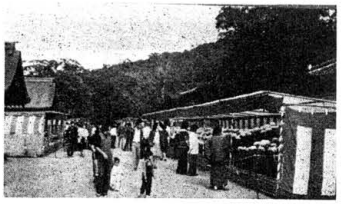
鐘崎　村田　四郎
「シャモニー」の登山ケーブル仰ぎみる終着駅は雲にかくるる

# 「御案内」十一月の行事

## ―菊花の香漂よう御社頭で　錦秋の一日をお過し下さい―

### 一日～二十四日　第九回　西日本菊花大会

―九州・山口各県より三〇〇〇余鉢の菊花が展示される―



全国各地で菊花展が開催されておりますが、当天社での西日本菊花大会は、全国大会に次ぐ西日本地区では最大規模で権威のある大会であります。

出品作品は九州各県（福岡・佐賀・熊本・長崎・大分）・山口県内の菊花愛好家がこの一年間丹精込めて育てた、大輪・懸崖・盆栽・総合花壇等、各種各色の菊花約三〇〇〇鉢が本殿前境内の特設会場に展示されます。又同時に会場に於いて菊花・苗等の即売会も催されます。

（摘　要）
期　間　十一月一日～二十四日迄
盛花期　三日～二十日頃
終日（夜間照明設備有）
その他　駐車場有（無　料）
観覧無料

### 二～六日　第七回　奉納盆栽展

―郡内愛好家秘蔵の各種盆栽一五〇鉢展示―

昨年まで玄海町、宗像町の盆栽愛好家によって奉納盆栽展が執り行なわれ、年々参加出品数並に優秀な作品が多く、愛好家、参拝者の間で大変な好評を博していました。

今年度は新たに福間・津屋崎の愛好家に呼びかけて宗像大社奉納盆栽会（会長・石松寛氏）を組織結成し、より充実した盆栽展として開催されることとなりました。

今年度は出展示数を約一五〇鉢（五〇席＝三鉢一組で一席）として会員の内より選抜展示することに決定、左記により開催されます。

（摘　要）
期　間　十一月二日～六日迄
会　場　於祈願殿・祈願所ロビ―の一・二階
その他　観覧時間・午前九時三〇分～午後五時迄
観覧料・無　料

### 三日　剣道大会

―小学生から一般までの五〇〇名の剣士出場―

この剣道大会は、郡内の小学校児童から一般までの、各学校・クラブ・道場の代表選手約五〇〇名の剣士が出場して、個人・団体戦に熱戦を繰りひろげ、郡内最高剣士の栄誉を競います。

（摘　要）
試合開始　午前九時より
会　場　本殿横境内
（但、雨天の場合は玄海小学校講堂に変更する場合もあります）

### 三日　奉納吟詠大会

―清香吟社社中（本部熊本市）の会員が美声を披露―

この吟詠大会は本年で第六回を迎え、熊本市に本部を置く清香吟社（会長・益田桜月氏）社中が奉納しています。毎年、九州各地の同社中の会員一〇〇余名が参加して行なわれます。

【摘　要】
開始時間　午前十時より
会　場　於本殿横境内
（雨天の場合は宿衛舎）

### 十日　第五回　奉納柔道大会

―郡内中学校新人戦―

郡内八中学校の一・二年生による、個人・団体の剛権を競う大会であります。出場選手は個人の栄光と学校の名誉をかけ、日頃の練習の成果を充分に発揮する力と技の手に汗を握る熱戦を展開しています。

又この大会で自信をつけ以後の技量が一段と進歩する実戦の場ともなっています。

【摘　要】
試合開始　午后一時より
会　場　於本殿横境内
観　戦　歓迎致します

### 十一日　第三回　かるた大会

―全国各地の「かるた」愛好家二〇〇余名参加―

この「かるた大会」には全国各地からの参加申込が有り年々盛大な大会となっています。昨年は二二〇名が参加出場、最年小は小学校二年生、最年長は八十二才の女性と年令差もなく「かるた」を愛好する者であれば誰でも参加できる大会です。

【摘　要】
開会時間　午前九時三〇分
会　場　斎館・清明殿・宿衛舎
観　戦　歓迎致します
（無　料）

### 十二日　第八回　献詠短歌大会

―県内外より二〇〇余名参加―

県内でも権威ある短歌の大会として年々発展しています。大会では、県内の著名な斯界の指導者の先方を選者として招き、講評と指導を受けると共に、参加者相互による批評、感想等を発表する、ユニークな大会と好評を受けています。当日は一般の愛好家の方々の来場も歓迎致しておりますので、各位お誘い合せの上、出席下さい。

【摘　要】
開会時間　午前十時三十分
会　場　於清明殿

### 十一日　小林寺拳法　奉納演武

日本少林寺拳法連盟宗像支部（代表・吉田正雄氏）の会員による模範技の奉納が当社御神前に於いて行なわれます。

【摘　要】
奉納式　午前十時～十時三十分
式　場　於本殿境内

### 十八日　第七回　宗像大社　本因坊戦

―郡内囲碁界の最高位を決める―

宗像郡内の囲碁愛好家が一同に会し、その年の郡内実力ナンバーワンを決める大会であり、囲碁ファン待望の秋の行事として年々充実した大会となっています。

【摘　要】
試合開始　午前十時より
会　場　於清明殿
観　戦　歓迎致します
（無　料）

## こもごも人生

### 残筆しがらみ草紙　(34)

玄陽　隠士

悲喜交々の思いでを「生かされて生きて八十年」の標題のもとに、元福岡県知事の杉本勝次翁が新聞紙上に述懐していた。翁を知る者、翁と同様に地球上の仕事を終え悠々自適の境地にある者、皆面白く読んだであろう。

杉本翁の回顧談は夏の真盛りの記事で、俗塵を避けて咲く君子の花も新聞に姿を見せていた。福岡の大濠公園に白蓮二万本、既に政治経済のうるさい俗塵を捨てているであろう翁の目にも、麗しく懐しく写ったことと思う。

然し、脱臭薬和の君子の花は咲いても、市内に二万の君子は住んではいまい。各住宅地や団地は、大濠公園の脱俗塵の風景とは縁遠い。到る所に飲み捨ての空缶がころがっているように、到る処に反対抗議暗償デモ坐込みの渦が巻いて、君子の影さえあるかないか怪しいものである、否、と反発する市民でも居たら、お目にかかりたい。難しい注文か、君子が居ないのか。

秀才コースを歩んで、立派な学歴を踏んだ杉本翁には、真心の支援者は勿論、多くの親愛の老友や具眼の知己があった。それが知事として市民として良識に富む実績に関係を持っていた。一部の杉村住民も殆んどが何かの仕事で山林を残させたのである。翁は生存者であるから今急いで批判など述べる要もなく、後人の公正な評価は将来に属する。

先頃、日立製作所に勤める四男が、二三日の休暇を利用して妻子を乗せた車を運転して帰省した。遠路の労をねぎらい、旁々老母等の保養の意味もあって薬王寺温泉に出かけた。帰路は迂回して粕屋郡久山町の清水に遊ぶことになって猪野大神宮の近くに車を停めた。老生は今まで何回か大神宮参拝と山菜料理賞味に来た。

杉村はじめ山林を主産業とし、どんどん杉や檜の木材に変って行く様を眺めて、その費用金額を聞紙上に曝した眞民選挙者は、神とも仏とも仰いでよい仁徳村長に対してどんな顔をするか」と。

独身青年の頃、京都は三条大橋、鴨川の寒風に堪えて坐る乞食婆さん、映画を観て後の夜は格別寒さがこたえる。橋畔の十銭食堂で安うどんを喰う。乞食婆さんも



杉村はじめ山林を主産業とし、どんどん杉や檜の木材に変って行く様を眺めて、その費用金額を聞紙上に曝した眞民選挙者は、神とも仏とも仰いでよい仁徳村長に対してどんな顔をするか」と。

独身青年の頃、京都は三条大橋、鴨川の寒風に堪えて坐る乞食婆さん、映画を観て後の夜は格別寒さがこたえる。橋畔の十銭食堂で安うどんを喰う。乞食婆さんも

伐採あとに杉苗が植えられているのが目につく。杉苗は珍しくはないが、この風景を眺めると必ず思い出す名村長隈徳の村政である。

苗木を植林しても三四年で木材にはならない。気温土質に因るが宮崎県のような成長の早い所でも三十年、もっと条件が低いと更に年数を喰う。尊徳翁に似た村長の督励説得が懇切でも、村民は起ち上らない。遂に村長自ら現場の労作に従い陣頭に立った。

こうなると人情負け、雑木林はどんどん杉や檜の木材に変って行く様を眺めて、その費用金額を



が立派な木材になって、村の財政は左うちわの気楽さ。現在は隣の久原村と合併して久山町となっているが、財政に立ち税金に不満の多い他町村とも比べものにならない。

それどころではない。財政の豊かさは、生活扶助を受ける老人の独居に、町当局の負担で全戸に電話が取りつけられ、中学にヨット部が設置されて、その費用金額を町が負担している。

どこも財政的に苦しんだ。世相は急変して、学校建設その他の公共施設に多額の出費を必要としたが、山田村は逆に村民の税金を軽くしたのである。数十年前の苗木



仁徳村長の愛郷愛人の精神には何人も敬服、賞讃を惜しむまい。

あらすじの話を傍に聴う老妻に聴かせた後、老生は次の言葉を加えた。「現今の不徳悪輩の市長村長や議員が、職権を私服を肥やす道具に使っているのと比べて、植林村長は神である。仏である。多額の賄賂をこまかして政治献金などと嘯く代議士は撲死すべし。これを選挙で出して、天下の物笑いを新

仁徳村長の愛郷愛人の精神には何人も敬服、賞讃を惜しむまい。

あらすじの話を傍に聴う老妻に聴かせた後、老生は次の言葉を加えた。「現今の不徳悪輩の市長村長や議員が、職権を私服を肥やす道具に使っているのと比べて、植林村長は神である。仏である。多額の賄賂をこまかして政治献金などと嘯く代議士は撲死すべし。これを選挙で出して、天下の物笑いを新



隣席で熱いものを食って、よく列んだものである。破れた衣類に投げ銭用のブリキ缶持つ老婆と列ぶ風景は、確かに珍奇であったろう。「寒くても商売ですから」と、青年の話しかけに対する返事。商売といっても何も売ってはいないが、詐欺でも窃盗でもない。通行人の同情心に点火して投げ銭を頂戴、堂々たる商売に違いない。

汚れた竹破れたりの着衣にブリキ缶は、外にもとでは使わなくても橋上の営業である。ごまかし、嘘つきのネクタイ族よりも、遥かに清い。その心根も社用族より遥かに素直だ。悪党議員やけだもの市長村長の人生よりも、遥かに香高いときえ思う。

## 神　こうのみなと湊　(90)

楠　陰　（その四）

楠早鳥作
福田長庵画

△昨夜は遅かったな、何処ぞへ出掛けたのか、▽朝飯の膳について、弾正が語りかけた。△実は大島の河野殿に伺い馳走にあずかり、つい長居をして夜更けて帰り着きました。▽と返事をし問わず語りに大島の模様を話し、昨夜乗った飛船について語った。△面白い話で、偶も若い頃から舟戦さについてあれこれと思案をめぐらしてみたが、その様に舟を改良するところまでは思い至らなかった。しかし、如何に優れた舟であろうとも所詮、人馬を運ぶ道具にしかすぎぬ海上の戦さでは勝敗がつかぬ、決戦はあくまでも陸でつけねばなるまい。▽弾正の言葉に触発されたように明継は昨夜から続けて新しい戦法を説き始めた。△仙せのように舟は人馬を運ぶ道具でしかなく、ようが従来の舟戦さはかつての宮方と武家方の蒲川戦のように海上の戦さ、それも陸地の場所にあるすべとを指していた。守備の方としては長くかつた防備線を守り切れず易々と上陸を許す不利な状況のもとで戦い野戦に敗退している。これを勝利に導くには敵よりも優れた舟で海上で一つ一つと殲滅するのが最善の策である。今領内の地形を按ずるに東、西、南方は山嶽にはばまれ要所には砦を築き万全の策をとっているが、残された北方は長い海岸線とそれの要めとしての草崎城があるにすぎない奴山の平野は全く無防備の状態におかれている。これを守るには海上で敵船を叩くより外に方法はない。▽聞きも終って弾正は投論した人いかにも北方は手薄だが当家が今までとって来た戦略の上陸は防ぎきれぬものとして、草崎から宮地嶽に連なる天険によって戦い敵の疲労をまつという方法だ、実はこのやり方は偶が館主殿に進言したのだ▽早出掛けた弾正は、朝から声高に論じあう二人に驚いてすぐから起きてきた。

昼過ぎ弾正は氏俊のもとに伺候した。明継に世を譲り無役となった弾正は時折り召に応じて氏俊から政策についての意見を乞われるまま述べる程度で、自ら社務館に現れるようなことはなかった。弾正は先刻の明継とのやりとりを述べ△若い者の考えは利口なようと悟った。―攻守共にあの飛船を軍の中核におく気か、海から襲うものは海で殺る。それが戦法と云うものかも知れないー と独りつぶやいた。

一方、弾正は使いを博多の才市のもとに走らせ津屋崎まで船を回航するように伝え、自身は徒歩で邸を出た。達坂の峠に立つと眼下に海が広がり、久し振りに気力の充実するのを感じた。

△一体、何の御用で―許六叔父が、また娘の容態でも悪くなったんじゃないかと心配していますよ。▽船の舷側から垂らした縄梯子をあがって来た弾正に才市は声をひそめて尋ねた。寄することはない、すぐは元気だと答え今度の調練の次第を手短に語り、協力するよう才市の背中をどんと叩き許六が白い歯をだして笑いながら△ここは一番弾正様に何とか勝たせろ。▽言って話の中に割り込み△一体どうすりゃあ勝つのでー▽と問いかけた。

△別にむつかしくはない、兎に角、兵員を上陸させさえすれば農の勝だ。▽明継は脚の速い船で迎え撃つからこれをかわす手段を考えれば付け加えて腕をくんだ。

落日が見る見る海にひたって、時は今日より一月のち、場所は勝浜、攻守ともに兵員は百名。攻撃を弾正がしこれを明継が迎え撃つことと取決めた。

翌日、氏俊は、これを家中に布告し、ただちに必要な兵員、武器が整えられた。明継は書面を大島の河野通に贈り、この調練に勝利をおさめることは将来の宗像の軍政に重要な結果をもたらすであろうと述べ、先般の飛船と同型船を一月内に七艘調えるように依頼した。一読して通之は明継の考えが先日の話から一段と前進したことを悟った。―攻守共にあの飛船

## ―福間町四校目の小学校―
## 昭和五十五年四月開校決定
# 福間町立神興第二小学校(仮称)
## 校舎建設着々と進行

人口増加が急速に進み、小・中学校就学対象児童が年々増加している福間町(的場重郎町長)に於いて、同町で四校目(福間・神興・上西郷)の神興第二小学校(仮称)建設が、去る八月の臨時町議会(瀧克己議長)で承認決定され、現在、昭和五十五年四月開校を目指し着々と校舎建設が進行している。

新設の神興第二小学校は、現在の神興小学校が同町東福間団地内に移転した、同町津丸の旧小学校跡地(町有地)を拡張整備して建設される。敷地面積約二、〇〇〇㎡に、五十五年四月迄に第一期工事として総工費四億一、〇〇〇万円をかけ、鉄筋コンクリート三階建て、延面積四、二六五㎡の校舎を始め付帯施設が新築される。

同町に於いては昭和五十四年頃より、神興・上西郷校区の宅地開発に伴い、特に昭和三十七年に県住宅供給公社が開発した東福間団地が完成してから昭和五十年には東急不動産の若木台団地を始め大小の団地が完成、現在では同町人口二八、〇〇〇人の約四〇%近くの町民がこの地域の住民であるが、更に津丸地区には西部不動産の大型団地である西武団地(仮称)も着々と建設されており、近い将来には、同町の人口の三分の二以上の人々がこの地域の住民となる。

これより以前、同町に於いては津丸地区の神興小学校を、校舎改築の必要性と、東福間団地の完成による同団地からの通学児童の増加、通学上の問題=遠距離、国道三号、鹿児島本線横断等=将来の同団地周辺の宅地開発等を見込んで、昭和四十五年四月に東福間団地内に現校舎を移転新設したが、計画予想以上に人口増加が進み、昭和五十年四月に八六七名の生徒が、昭和五十四年四月には一、二六七名と四年間で五〇%の増加で、収容能力をはるかに超える伸率となって、教育環境は最悪の状態を迎えている。この為、同町では、昨年度より神興小学校の二分化を計画、再度津丸地区の旧校舎跡地に新校舎建設を決め、町議会の承認を求めこの度の開校決定となった。

神興第二小学校(仮称)の通学区域は鹿児島本線を境として、若木台団地全域、津丸、久米、通り堂、八並となる。五十五年四月の開校時は、児童数四二〇名位で一六学級でスタート、将来は二十四学級迄を計画している。

この神興第二小学校の開校によって、小学校三校(神興・神興第二=上西郷)、中学校一校(福間東=昭和五十四年四月開校)が設置される。

## 心字池へ
## 奉納錦鯉放流

中間市の 永露 勇氏
林 数丸氏

当大社の放生会(十月一日～三日)を真近にひかえた九月二十八日、中間市浄花町新手の林数丸氏と同町の永露勇氏の二氏が、体長五十センチ位の黄金鯉と三十センチ前後の錦鯉三十匹余を奉納された。

当大社の心字池は、昭和四十三年春の当大社大御遷営計画に依り改修復元されたものである。同四十六年十二月の遷座大祭の頃には、郡奮魚組合を始め、崇敬者等に依る奉納で、五、六百匹の鑑賞用の黄金鯉、錦鯉等が放流され、群れ泳ぐ参拝者の目を楽しませていた。今年六月頃の豪雨で、同池があふれ出し、数百匹の鯉が近くの釣川等に逃げ出している。このことを知った、崇敬者である、同氏は、早速郡組合の軽トラックに乗って運搬、放生会にふさわしく奉納放流をされたものである。当社では両氏に対し感謝状を贈り、謝意を表した。

## 「福岡県交通安全フェア」開催
### ―当大社『コンピーターみくじ』も推進に一役―

去る九月二十一日～二十四日の四日間に亘り、九電記念体育館を会場とした「福岡県交通安全フェア」が同実行委員会(会長亀井光福岡県知事)の主催で催された。この交通安全フェアは、福岡県が初の試みとして、次代を担う子供たちを交通事故の災禍から守り、安全に、快適に暮らせる福岡県づくりのために県民一体となって、交通事情を認識し、新しい都市交通を考え、交通に関する正しい知識を学び、県民の交通安全意識の高揚を図る目的でなされた。

会場には、遊びのゾーンをはじめシンボル、運転者、歩行者並びに道路ゾーン等八つのゾーンが設けられそれぞれのゾーンに意を凝らした設備が設けられた。

又この会場の一角に、参観者の運転マナー向上を目的とした、運転経歴と、その人の運転方法に依る運転者の運勢判断を行う当大社の「コンピーターみくじ」コーナーも設けられた。

会場には、各小学校の生徒が主体であった為、コンピーターみくじは多々無理な面もあったが、約千名のみくじ授与者が、このコーナーを賑った。

## 神職(しんしょく)

神仏混合の思想が具体化されたものとして宮寺の形式がおこると、別当(べっとう)とか検校(けんぎょう)とか称せられるものが在来の神職より上位に置かれた例もある。もともとこれらは正統の神職でなかったにもかかわらず明治維新以後、還俗(げんぞく)して神職になったものが多い。

このように多種多様であったが、これらを統轄支配したのは、古くは神祇官、中ごろは寺社奉行、近くは白川・吉田の両家であった。白川家は伯家とも呼ばれ、神伯(神祇官の長官)の職を世襲し、吉田家はその配下に属するものであった。

近世に至り吉田家では代代神道学者を輩出して世の信望をあつめ、神職界における勢力は白川家をしのぐありさまで、白川家の免許状を受けるものよりも吉田家の免許状を受けるものが多くなった。これらの神職のうちには、銭金を納めて五位に叙せられるものがあったので、これを大夫(たゆう)と呼んだ。要するに朝廷の権力が衰え、神祇官の制度がゆるんだため、すべてが私的なとりはからいにまかせられていた。

明治維新が、このような状態を改めようとしたことはいうまでもない。すなわち、先ず神祇事務局を設けて職制の定まるにそなえたが、明治元年(一八六八)閏四月に神祇官の復活を見た。しかし、大政官の管下にあったので、明治二年七月、神祇官を太政官の外に立てた。同四年五月、社格制度を改めると共に、職制を定め、官社には祭主(伊勢神宮に限る)・大宮司・少宮司・宮司・権宮司・禰宜・権禰宜・主典・権主典などを置き、諸社には祠官・祠掌を置いた。これと同時に世襲社家制を廃止しようとしたが徹底しなかった。同年八月、廃藩置県の断行と共に官制の改革を見、神祇官は廃せられ、太政官の下に神祇省が置かれたが、翌年三月には神祇省を廃し教部省を置き教化運動を推進めようとした。

この運動にあたるものとして教導職が置かれ、神官はこれを兼ねることとなった。しかし僧侶その他も教導職に補せられていたため、教化方針について意見が一致せず、八年四月に至ってこれも廃止された。このことは十年一月の教部省の廃止を招き、その事務は内務省に新設された社寺局に引継がされた。

社寺局は十年十二月神官の等級・員数を簡素化し、その後、二十年三月には伊勢神宮を除き、神官たるを停めて神職とした。

## 信仰

社寺局は十年十一月神官の等級・員数を簡素化し、その後、二十年三月には伊勢神宮を除き、神官たるを停めて神職とした。

三十三年に至り社寺局は神社局と宗教局に分れ、大正二年(一九一三)六月宗教局は文部省に移管され、昭和十五年(一九四〇)十一月神社局は内務省の外局たる神祇院に昇格した。このころ、神官・神職待遇は向上しつつあったが、敗戦後、昭和二十一年のいわゆる「神道指令」によって、神社が宗教法人となり、新しく発足した神社本庁(東京)の下に置かれるものが多く神職の任免も、これにゆだねられるに至った。

もっとも本庁に属さない単立神社もあるが、宮司・禰宜の二階級も簡素化されたこと。及び女性神職が復活されたことは特記に価するであろう。

## 巫女(みこ)

今日では神前で神楽の舞などをする少女を指す。一般に女性は男性に比して霊媒的素質を多く持ち、神の託宣をうける適格者としては、未婚の女性が選ばれた。この風習は、沖縄や奄美大島などに残され、また東北地方の「いたこ」にも、その面影が伝わっている。「いたこ」は「いちこ」、すなわち「いつき」の転訛といわれるが、むかし松尾神社(山城)には斎子(いつき)と称する者があったという。しかし後には神託をうけるだけの力はなく、男性神職の補助と化したものが多かったようで、かえって民間に放在した系統のものが活動的であった。奈良時代でも民間の「みこ」の類を取締ったようであるが、平安時代以降、迷信的な方向へ進んだものが多かった。「みこ」は口伝は歌を唱え、単純で綾模な舞踊をし、精神統一をはかり、憑霊(かがり)状態になって霊告を伝え、予言する。俗いう口寄(くちよ)せ」である。

以下次号

## !!やったぜ青春!!
## 九州一周八六一km歩き旅

福間町の 小柳 勇君(19才)
城野 誠君(19才)

「暴走族」「ディスコ狂」「非行青少年」と現在の若人にとって有難くない間像をかぶせられて「世間のとかく現在の若者は根性がない」という批評を見事にはねのけた、十代の若者二人がここに出現した。

この若人は福間町に住む、小柳勇君(同町手光)と城野誠君(同町四角)の二人で共に十九才の大学二年生である。

小柳・城野両君は"一生一度の青春時代の思い出に"と「九州一周徒歩旅行」を高校時代より計画、進む道はそれぞれ違うが希望の大学にも見事合格、勉学に余裕の出来た二年生の今年の夏休みに念願の徒歩旅行をと、三月より具体的な計画を立て、アルバイト等をしながら資金を貯、体力を整え出発に備えた。

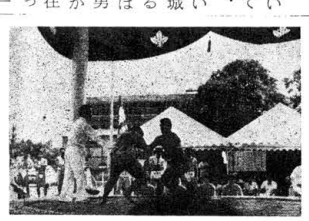
両君は通過する各県より精密な地図、ガイドブック等を取り寄せ検討、「九州一周」計画を、徒歩キロ数八六一キロメートル、日程を三〇日、資金一〇万円(二人で)、一日徒歩三〇キロと決め、決行の日を待った。

七月二二日早朝、両君の家族だけの心配そうな見送と激励を受け背中に必要品をつめた重いリュックを背負い、計画の第一歩を元気に踏み出した。

一日目三〇キロを目標に、福岡～佐賀～長崎～熊本～鹿児島～宮崎～大分～福岡のコースを歩き続ける行程。突入した、しかし一口に九州一周といっても、八六一キロはあまりにも長く、真夏日の太陽の光は強く、路面は暑く、一日三〇キロといっても、生まれて一度も歩いた経験も無い二人には想像以上のもので『足は豆だらけ、爪もはがれ、最初の頃は足腰は棒のようになり、休憩を取ると次に一歩を踏み出すことが出来なかった、途中で断念しようと思ったことも少なくありませんでした。でも見ず知らずの人々の親切と励ましを受けるたびに、今日一日だけでも頑張ってみようと、二人で励まし合いながら一日一日を過ごしました』と苦しかった道中の感想を語っていた。

出発して三十二日目の八月二日午後七時四〇分、小柳・城野両君の真黒に日焼した顔が、福間町役場の正門を入場してくると、役場前広場に的場町長、両君の両親家族を始め多数の町民が拍手をもって迎え、町長、両親より花束を受取ると、両君の不屈の精神と努力に対し一段と高い拍手と歓声が沸きあがった。出迎えの人々から旅行中の感想を聞かれた両君は"無事完歩できたのは、各地での多くの人々の親切と励ましによるものです。無料で宿泊の世話をしてくれた神社、寺院の方々、道を教え休憩の世話してくれた人々、車を止めて乗車をすすめてくれた運転者の方々等、他人がこんなにも親切で人情の厚いものだとは思ってもみませんでした。これが一番の思い出です」と、青春を完全燃焼させた汗とホコリにまみれた顔が清が清がしく、いかにも満足そうであった。

## 第二十二回 県民体育大会
## 相撲競技の部
### "宗像郡●堂々三位入賞"
### ―於・宗像大社常設相撲場―



広く県民の間にスポーツを振興し、その普及発展とスポーツ精神の高揚を図り身体健康で明朗な県民生活の確立に寄与しようとする目的で、毎年開催されています福岡県体育大会は、本年は福岡地区の当番に当り、宗像郡内において、水泳(福間町、台風の為中止)バスケット(宗像町)、相撲(玄海町)の三競技が開催されることになりました。

相撲大会を開催するに当り折角玄海町で開催されるので是非参加をしようという気運が高まりましたが、郡体協は相撲協会なく苦慮していましたが幸いにも有志の方々の大変な御努力により、宗像郡代表選手の出場が決定しました。

九月二十三日、秋空の澄みわたった好天気に恵まれた宗像大社の常設相撲場に於いて、県下より十六郡約二百名の選手が参加し、入場行進、大会会長挨拶、引続き選手を代表して宗像町の大竹君の宣誓により大会が開催されました。当日は、日曜日でもあり相撲場の回りには、選手の父兄や家族で大変にぎわい、終日賑いをみせていました。

初出場の宗像チームも地元開催というので、毎夜相撲場で練習を重ねた結果、青年の部では堂々三位に入賞致しました。

【成績】

(個人戦)

優勝 坂口 最(山門、三池郡)
二位 小林文夫(八女郡)
三位 海谷英章(山門、三池郡)
三位 安藤芳史(遠賀郡)

(団体戦)

◇一般の部
優勝 北九州市
二位 山門、三池郡A
三位 筑紫野市
三位 大野城市
◇青年の部
優勝 北九州市
二位 遠賀郡
三位 八女郡
三位 宗像郡

―◇―◇―

尚、郡土、宗像郡代表チームの氏名は左記の通りであります。

宗像郡チーム
◇一般の部
監督 大竹益雄(宗像)
先鋒 七田光晴(玄海)
中堅 西祖一夫(津屋崎)
副将 田畑龍一(福間)
大将 大竹善雄(宗像)

【ご案内】

**第三回宗像大社『小倉百人一首かるた大会』参加出場者受付〆切迫る**

宗像大社『小倉百人一首かるた大会』係では第三回大会参加出場申し込を左記により受付ておりますが〆切が迫ってまいりました。参加希望の方は早目に申し込みください。

◇種目
A級(三段以上)・B級(初・二段)・C級(競技かるた経験者)・D級(一般・高中小学生各部)・E級(初心者、チラシ取り)
◇参加料
A・B級五〇〇円、C・D級三〇〇円、E級一〇〇円(一人宛)
◇〆切
昭和五十四年十月三十一日(当日消印有効)
◇受付(詳細問い合せ)
福岡県宗像郡玄海町田島宗像大社社務所内
「かるた大会」係
TEL(〇二四〇)②一三一一代

# 宗像大社歌会 俳句作品集（二〇一）

福岡　入江　柳江

ならわしや明治の女うちわ風

田熊　力丸　一郎

晩夏光山陰の海藍のごと

名古屋　野崎　傳三

尾瀬沼の花野に老いの影ながし

土穴　八尋　恒夫

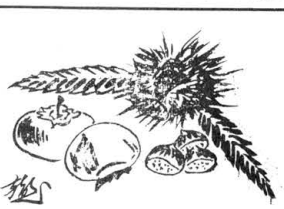
露店出て若人踊る秋祭り

田島　吉武　武雄

ラマ塔に難民帰る秋晴れに

藤沢　玄洋子

辺津の森ひぐらし鳴いて夕陽落つ

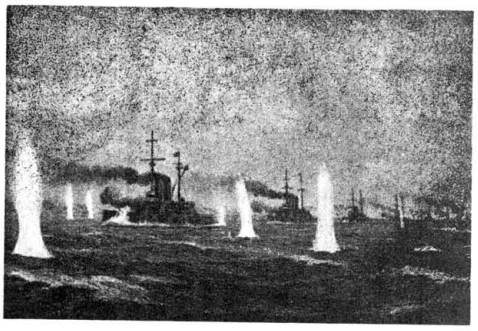


# 海の寄物

## 軍艦出雲―ある巡洋艦の生涯 (六)

(26)

いしいただし



ノヒロクは続ける

「戦闘は並軍から行う出撃砲弾を避けて行陣形で行われた。敵の勢力は四隻の戦艦と八隻の装甲巡洋艦から成り立っていた。それに快速伝令艦「竜田」と「千早」がこれに加わっていた。しかしこの二隻は戦闘的意義を有せず、単に伝令の役目を果すだけで、単縦陣の左側に位置を保って、わが軍から打ち出す砲弾を避けていた。「竜田」は三笠と並び「千早」は出雲と艦首（ハウ）を揃えていた。

味方は敵に比べて十二隻をひきいていた。彼我艦隊の距離は約三十ケーブルだった。

海上には、透明な煙と霧が織作って、逆立つ波浪にからまりながら、風に吹き捲くれてはきれぎれに飛び散り、そのたびに灰色の空を背景にして、ぼんやりと敵艦が浮き出すのだった。

敵の艦隊は単縦陣を作って、それぞれ前続艦の航跡に乗って進んでいたが、まるで怒った幻想的な怪物か何ぞのように、われわれの方に向って、ピカリピカリと稲妻を放つのだった。無論わが艦隊もこれに応戦した。（中略）

これは、つまり正面衝突した両帝国の運命を賭して、ふたつの主力が戦っているところだった。後方では右舷に当って、巡洋戦隊同志が砲火を交えていた。大砲のすさまじい轟きは、遠くの方やごく近くに物凄く響いて渡って、まるで空が鉄の丸屋根に変じて、これを百ブードの大槌で叩くようだった。（中略）味方の各艦の周囲、特に先頭戦隊の周囲に重々しい金属が破のように落下していた。日本側の砲弾は水に衝突しただけでも炸裂した。黒褐色の煙と真紅な焔を伴って巨大な水柱が、海を沸騰させ水面に唸り声を立てながら、みるみる捲きあがってゆくのがみえた。

（ペルチック艦隊の潰滅、上脇進訳、原書房より）

さて、この両国の激闘の様子をつぶさに見ていた人がいた。沖ノ島にきていた宗像大社の神職、佐藤市五郎である。沖津宮社務日記には

「五月二十七日、西風強く霧雨一、本日、午前七時四十分頃、敵艦隊、東水道を通過せしものの如し。警戒を要すとの至急電報ありしと望楼より報知に接す。正午より本島の西北に当り砲声盛に聞ゆ。午後一時頃、我艦隊見えざりしやの電報あり旨通知を得、一同視線をこらして海上を警戒中、二時十五分頃より砲声次第に近づくが如く聞ゆ。気を付けて西方を見し、本日は霧のため海上五海里の外は見えず。見張りに困難なり。

二時半頃、敵味方か、一隻は砲火を前後左右に受け、最も苦戦の有様にて、必力応戦しつつ西南四海里の処に現る。我が艦か敵艦か、我ならずば必ず敵ならんと、ひとみを定めて能く望めば豈計らんや、我が和泉艦、敵艦の砲声を受け、応戦しつつ退却するにあり。間もなく敵の艦隊十八隻、水雷艦逐合せて五、六隻、忽然として四海里の処に現る。其の陣形整はざるも、艦間水雷駆逐を挟み、西北に向かい進航す。余等一同怒に堪へざるも、如何とも為す能はず。望楼にて直に所々に急報せしと（後略）」と記されている。

## 大島捕鯨資料 その五

第三　災害其他ノ事故ニヨリ株金二相失アルトキ其弁償ノ方法ヲ定ムル事

第四　成規ノ外重要ノ規則ヲ設ケ又ハ社則ヲ改正スル事

第一　営業ニ関スル利害ヲ監別シ其議行ヲ起章シテ臨時会ヲ開ク事

第二　書記雇等ヲ増減黜陟シ及ト給料ヲ定ムル事

第三　本社ニ関スル訴証ノ生ルトキハ原告トナリ又ハ被告トナル事

第五章　集会

第二十三条　本社ノ集会ヲ分テ臨時会総集会ノ二類トス

第二十四条　臨時会ハ役員及ト惣代委員ノ集会ニシテ営業上臨時ノ事件ヲ議定スルモノトス

第二十五条　総集会ハ毎年九月十月翌年ノ五月之ヲ開キ一季出納決算ノ当否及ト次回業務ノ目的ヲ議定スルモノトス

第二十六条　諸役員ハ前期ノ権限ヲ擁工専然事ヲ決シ愛憎以テ

第二十七条　諸役員私ニ本社ノ雇丁ヲ使役シヌハ本社ノ備品ヲ私用シタルモノハ至当ノ償金ヲ出サシム

壱番銛乗組　金四拾銭
揖取工　金四拾銭
仝水夫壱名ニ付　金参拾銭
弐番船
波座士　金参円
銃手　金弐円
揖取工　金弐拾銭
仝水夫壱名ニ付　金拾五銭
但シ壱番銛ヲ突カズ亦銃ヲ発ヤザルモノ
亀切金六十銭
右ハ定尺（背美・座頭）四尋弐尺
長須拾弐尋
以上本魚

賞与之例ニシテ本尺ニ満タザル座頭長須ハ割ヲ増給ス背美ハ定尺ニ満タズト雖ドモ座頭長須定尺之二及ブモノハ弐割ヲ増給ス

前記載スルモノ外現時功労ノ軽重ヲ調査ノ賞ヲ行フ

明治十八年一月
大島捕鯨商社
鯨肉配分法

壱角弐切　五寸角壱切
ホガイ弐切　赤身五十斤　波座士
児袋半分　首巻赤身
上目　弐切　五寸角壱切　魚切
黒皮五斤　赤身拾五斤　銃手
赤身四拾斤　揖取水夫中工
以上

鯨肉配分法
仲津宮献備　黒皮十斤赤身弐十斤
蛭子宮献備　同　断
荒船宮献備　同　断
和田須賀宮献備　同　断
口口　黒皮五斤赤身十斤
医師　黒皮五斤赤身十斤
諸役員祭中黒皮四十斤赤身六十斤
鑑定派出員　黒皮十斤赤身弐十斤
別当　黒皮八斤赤身十五斤
社長　黒皮十斤赤身三十斤
幹事　同　断
会計　同　断
書記　同　断
雇掛　黒皮五斤赤身十斤
株主　黒皮十斤赤身三十斤
其目山見番人赤身弐拾斤
地島沼山見番人黒皮五斤赤身十五斤
事務所宿許　同　断
事務所使夫　赤身十五斤
地島山見番御宿許　赤身弐十斤
地島村役員へ　赤身弐十斤
事務所用　黒皮五十斤赤身弐百斤
以上
惣計　弐千〇〇九斤
内訳　黒皮　五百〇四斤
赤身　千五百〇五斤
（K）

表紙

商社控
賞与定則
鯨肉配分法
大島捕鯨商社

賞与定則
仝　銃　金壱円
壱番銛　金六円
弐番銛　金四円
仝　銃
浮鼻物　金七拾銭
仝　鼻綱　金五拾銭
沈魚鼻物　金壱円
仝鼻綱　金七拾銭

## 鐘崎民俗誌 その十七

楠本　記

### 延縄（その一）

〝鐘崎ではナガノオと呼んでいるが、普通にいえばノベナワじゃろう。これをはえるのがノウハエたい。この漁は鐘崎では古くからやっとった。葛であんだコシキのふちに枝針をひっかけて糸巻きこみ、漁場につけは餌をつけてノオをはえて魚を獲る漁たい。〟と花田国五郎さん（明治二十八年生）の話は次第に熱をおびてくる。

四月五月になると小エビをとってタイやら何やらをとりにいった。これをとって餌にしてタイ、ブリ、ヒラをとった。餌がいいけよう食うた。春になると二・三月、四月になると網のカナギを貰うてノベナワの餌にしてハエたもんじゃ、これは長わんもんなしじゃった。

次には夏か、夏はよい ですなあ。大けなイカをとって丸切にしてはえるのがはやりよったもんじゃが、それより海女の稼押しで忙しうしてそれどころじゃなかったと。

秋になれば「オオコムシ」で小ダイをとった。今の季節が時期じゃが、よくる年の二月頃までは」れでとりよった。「オオコムシ」はメメズの太いとで餌用が山口県の埴生、才川あたりから買って、イケマに活かして売りにきよったもんじゃ。山口県の豊浦町あたりからも餌舟は二、三ぱい来とったが、だいたいは地元の餌用が、神湊、勝浦、津屋崎と浦々を売り歩きよった。

十月、十一月になるとナガダコを餌にしてダイをとりよった。この漁は四月頃もやっていた。ちいと寒くなるとタコをよく使うもんもおるが、鐘崎ではブリはコギノーがおるもじゃった。

これが鐘崎のナガノーの年間のおおまかなとこたい。この外にはトーヘイをとったなあ、トーヘイたあハモの太かやったい。これはイワシナワいうて、イワシ網からイワシを買うて、それを切って餌にして沖ノ島あたりで、はえたもの、戦争あがりには沖ノ島の近所でようけとれたもんじゃった。アラノーもやったが、これはサバのイッコンガケを深さ三〇尋くらいの底にはえてとった。

今はアジノーと言うて、小アジをキンチャクから買うて、イッコンガケにしてはえている。またイワシのイケガケと言うて、中羽イワシを捲網から買うて、これを餌にかけてとっているが、秋頃がおりたってからの方が漁はえそことある。

変わった餌を使うたのは、夏ナマコを釜がからからになるまゆであげて使っていた。これは黒虫もおんなじことして餌にした。

ハノーは昭和二十年ごろまで麻苧でつくっていた。それから紡績になり今はクレモナを使っている。麻でつくった頃はそりゃあえらかった。水に麻苧をつけて、それを糸紡ぎでぶんぶん廻して、三〇尋くらいの長さにし、またそれを二本ずつより合せて、長いものなら七〇〇尋ちかく造り、ブリワと言って、糸が太いのを特別につくっていた。今は浜に魚がおらんことなったので、みんな瀬にやっている。

昔は、沖で山あてをして漁場を探していた。山やらが重なりあうところを目印にしていたので、すいぶん頭がいっぱいあった。しかし今は山はけずられるし、木は切り倒されたりするので、山あても何もあったもんじゃない。その代り漁探がでけたので、漁は昔に比べて、し易うなった。

明治のおわり頃、ノベナワをやっていた船は鐘崎で二〇艘くらいのもんじゃった。昔は人間も少かったが、船も少かった。太い船で六尺カダぐらいの船に五人乗でやっていた。櫓は五丁櫓か四丁櫓、鐘崎で七尺カダの船がでけたのは大正に入ってからじゃった。

まあどこの浦でもこのノベナワにわ勝てんじゃろう。〟

国五郎さんの話を聞いて福岡県漁業誌（明治十一年編纂）をみると、筑前国の長縄漁として次のように掲載されていた。

鰯長縄
海鳴魚長縄
小鰯長縄
鮫長縄
アラ・アコ長縄
鰯長縄
トオヘイ長縄
ハイ長縄

この中で話題にのぼらなかったのは、エイ長縄と鮫長縄の二種であるが、エイは「漁場八海濱深サ七八尋位海底ハ泥土多キ所ヲ善トス」と述べているように漁場の条件が異るため生息していないのかもしれない。おそらく博多湾のようなところで此の漁は行なわれたのではなかろうかと思われる。近く志賀島の漁労調査を行うので、その折りにでも調べるつもりにしている。

鮫長縄は、鐘崎で正月に欠かせぬ珍味として〝ハノーサバ〟があった。これは、小形のサメを開き、天日で干しあげて、これを小さく短冊に切ったものを砂糖醤油にひたし、充分に味がしみこんだところで食べるのだが、このノーサバなる呼称は多分〝ハノーサメ〟延縄でとったサメがなまって〝ハノーサバ〟となったものだろうと解釈していたら、内田恵太郎博士の「私の魚博物誌」に〝サメ、サベ、サバと変化したことばで、沿岸性の小形のサメを瀬戸内から九州西北部でノウソというのと合した名のノウサバであろう。〟とあるので、いずれが正しいか研究の必要があると思っている。

（以下次号）

## 宗像大社奉納盆栽会 会則並に役員決定

宗像大社奉納盆栽展は、去る昭和四十七年に玄海町、宗像町の愛好家が集い、当大社神前に各自秘蔵の盆栽を奉納展示、広く一般参拝者に鑑賞してもらい盆栽に対する理解を図ると共に、郡内愛好家相互の親睦と技術交流を促進する目的をもって、翌四十八年十一月に第一回展示会を開催したところ始まる。以来昨年まで進され、この間、出品展示数も年々増加、品質も見事な物が多く、参拝者の好評を博して来た。

この盆栽展は当初から愛好家の自主出品展示の形式で行なわれて来たが、今日では運営上種々の支障を来した し、関係者間に於いて組織運営の必要性の声が高まり、現在までの奉納盆栽展を発展解散して、この度、宗像大社奉納盆栽会を組織、「本会は宗像大社の御神徳発揚に努め、併せて会員相互の親睦を図り、日本の伝統と格調高き美を遺憾なく表現出来る、盆栽道の普及、創作、技術の研鑽に励み斯道の発展の一助とする」という目的のもと、会則並に運営方針を明文化してより充実した奉納盆栽展を行うことなった。

去る十月四日、宗像大社奉納盆栽会実行委員会が、郡内四町代表者二十四名出席のもと、当大社斎館に於いて開催され、役員選出並に運営方針、今年度盆栽展実施要項が審議され、役員には左記の方々が就任された。

記

◇宗像大社奉納盆栽会役員

会長　石松　寛（宗海）
副会長　田中　一男（宗像）
〃　田原　一芳（宗海）
地区代表理事
今吉賀七郎（宗海）
中村　咲雄（宗像）
青谷　守成（福間）
大賀宗之助（津屋崎）　以上
敬称略